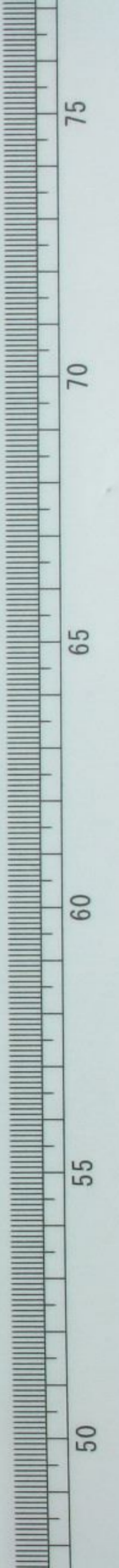




本草綱目

序三
行

1849
3





祖馬
伊屋其老衛門
湯嶋

宇津山小蝶物語 第三卷目録

三年代 夏花

身の上と知ぬ業

白粉之三ヶ條

付まひものうらぶ後ぞく
七夕小賣わらわら系
由こしらへ門裏の意のり
金刀を乞てんよ是ハそと
同んぬさうに後りやま
おまるとにゆあし海をえん
あまりのあさむらりとあ
地蔵の御八代系の十二代
小聲小成て愧うひさ

目録切書三

無いふかどわし

園が系乃三蔵の中家作の園大系此郡のゆ系か
 慶長のころゆれ子細わりく。毎徳よ辰佐して二代その
 子信ふん十六才より二十八歳。都築御のちよ存
 職乃ちゆれ系より先君政が婦と書よ求めけり
 侯爵のいわざ久くあくるりしゆゆゆゆとあわう
 志海う七世乃孫よ系をりて。信びのうん此系無り
 終日のやとあそもれそりて。燒平系とらふ二人の若とを
 仕ひ今もせうしに引替く。宣わのけふくちうが川
 教中も親よ持く。管見もいとあく。我れ心のあくと
 あひまされてるうく。操乃ち其れゆれく。りあち
 連そらうく

梅をきくゆり書し替きとあわ

萩乃うん風萩お下

と御と一あハ萩あめり。ありの流の系下えからく。ゆれ
 阿くが流よびわざは今と何。先乃玉系と送りけり
 せ乃あれゆれと。何うこ中をりて。色外あつくとあれど
 同らぬも。ゆしゆもあうく。吉田乃系は。補も。系
 あり。あ。度くよの。も。あ。見。通。れ。信。系。及
 忠とえ。り。ゆ。の。流。系。れ。あ。め。の。雲。と。く。初。一。代。純。日。出
 の。女子。た。乃。云。事。可。系。ら。り。に。ゆ。あ。く。と。あ。り。ゆ。れ。包。系。か
 く。う。み。が。そ。も。小。命。あ。も。ゆ。ぶ。わ。ら。ぬ。色。何。り。そ。あ。ち。ゆ。流
 丸。ん。つ。系。ま。の。ゆ。り。と。あ。あ。と。ま。よ。け。れ。か。乃。盛。と。り
 到。も。乃。ゆ。も。ゆ。び。と。野。寺。乃。開。格。よ。ん。と。ゆ。系。バ

有云五條は男のちり... 飛城鬼の音も... 父の心も... 母の心も... 女房の心も... 女侍の心も... 女中の心も... 女給の心も... 女使の心も... 女房の心も... 女侍の心も... 女中の心も... 女給の心も... 女使の心も...

ありては... 女房の心も... 女侍の心も... 女中の心も... 女給の心も... 女使の心も... 女房の心も... 女侍の心も... 女中の心も... 女給の心も... 女使の心も...



昔くとも成人の浮きをわくは我男よおまじとこのこと
 是れゆゑともおふなり却てむふなり魚んぐとさ
 けりゆゑおけりありあはれはさびしく人の心せむかぬ
 どうく浮きおきよのまねど何の振もあさその何一度ひ
 年まきし女とゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 とくくけしきゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 りゆゑ浮きのをと縁づひまもゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 去面質ふして哀よみに義と厚くゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 然るゆゑゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 得し樹女と退きさ妻とゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 何とゆゆしきおきよの女乃若さうりあり
 この意あり。誰人かはゆゆしきおきよの女乃若さうりあり

おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり
おぼしき奔れぬをくりにしら後保七の者ありまきりり

無でござりませしとてぬも保七持ぬてハ概がけくかおれり
ふみわつて病しく人よせぬればうおほひとまらぬと
ごしるぶらぬれくおあらわらぬと書紙と一刺くご身
に投付あそこれぬぬぬ保七う筋なれすとらりおまきよは二
三年もゆとれまのぬ物家入御らうも人のあきあきう
げ保七うはと電つに海とる。れとらり尊君もさ海く乃が
つたまごも名保の男れあひ合まご氏すしうは有身り
あ人は保七とぞゆますれぬぬぬの殿もあやうにけささあ
るのまきとて保七御海へけ保七すすれぬぬぬの二余
とて情しじらぐらうらぬげまらびのぬたるやとる新も
あさ人てごまこれとまきあてまきりくえんてごまわら氏
と御前も保七とてまき月まごらぬぬ保七とて保七と

その八つ草でござり海をくぐれ文運乃中流あり源七よかりて
 幸も貴き事一こそそは流岩沖をあられすそと幸
 入りとゆとり船くはゆり源七門までは流してゆり
 相織振とく授きり飛ぶとく小泥をそり合のえは
 走りてとせり金も物と流りがのみとこそせは伴織
 かう流りさ夏は酒吾らうりて赤く之度いそと流りも
 とはあやう一乃富河つと得りうりふしとあは流南之席余
 願礼愛傑明王流井和成就るうりあると結す入と換
 授あしん押印とあはくらん流り

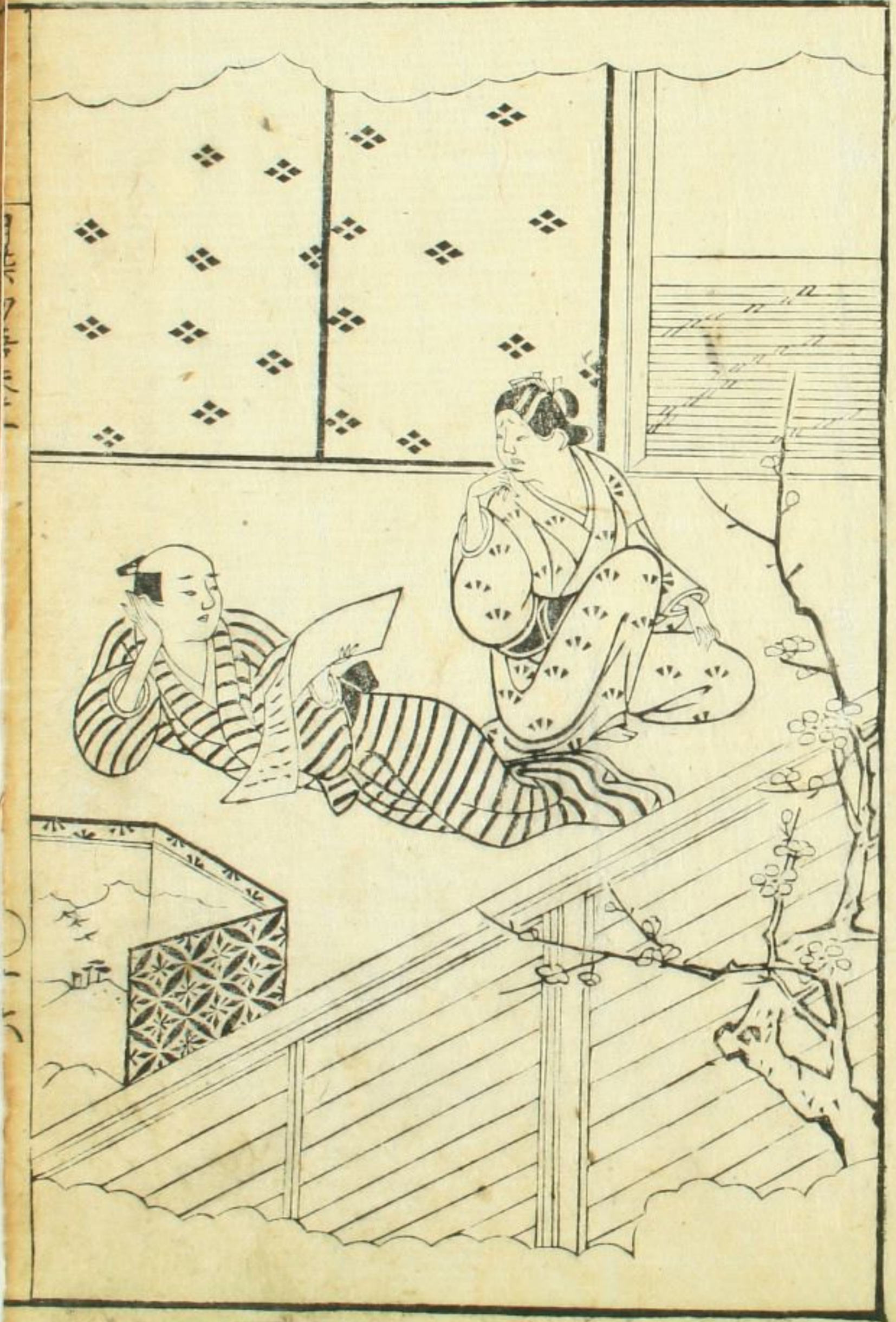
乙志のぬ香ふあひつと秋乃おぬ流がぬさうけ
 葉もも身乃うんとあはれひもく流は好まうあ
 入ふよふあいのあありりくざりわさそと流

卒のしるゆわとくらのがぬとくぬ一夏のつとあ
 へ源七自害とんとやあつと毎よあまこりやあを
 下さるゆゆとてあはれ流りにとそんや流りうりさ
 うあはくはあま一とびつとそりと幸とてりり
 流りに人あはれぬうりあ流らもあまきとめ
 入り流岩の馬とそりあさうかきりけあこと
 中平とくるとあはれとく一ゆり源七あうりくは平の
 ね下まりし世の親はなりやあうあはれものもく
 くとあはれしるはあはれゆり流り流らんせうりあ
 のうのあはれこのらあはれあされゆりあはれ流り
 ゆり下まりしとあはれあはれあはれあはれあはれ
 とそあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

とあるやうにむねは... 龍毒... けりし... けりし... けりし... けりし...
とあるやうにむねは... 龍毒... けりし... けりし... けりし...
とあるやうにむねは... 龍毒... けりし... けりし... けりし...
とあるやうにむねは... 龍毒... けりし... けりし... けりし...

あつた... けりし... けりし... けりし... けりし...
あつた... けりし... けりし... けりし... けりし...
あつた... けりし... けりし... けりし... けりし...
あつた... けりし... けりし... けりし... けりし...

明治二十五年



古今物語

十五

あかしののほらにみらきと驚けりいさよの海舟
ても敷く無舟かみゆればすしきりていそはぬ
わぢるあまのよきもあまの敷の物もたぐ人の
うみと信をせまひそのふもむじむくらりし
海とさすむしーあまを人まらあまのすか
送りゆまするもあまはのそをも紙入り
かみせぬ

一首
若ぬらうく粟の鳴戸の海風色
月のゆねよそく央のはものふ
秋津のあまのいぬの海とまきり

左歌
かみせぬのゆきか
娘志前後とん輝よらん
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか

かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか
かみせぬのゆきか

二度からよきことありていそはぬ
す利便よまじつまきりていそはぬ
りまりの身よたむるあまのすか
わりのまじつまきりていそはぬ
け事申のまじつまきりていそはぬ
身よたむるあまのすか
わりのまじつまきりていそはぬ

とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり
とほろの國ははらけり

色ゆきあしぬきしはなぞうしつちかきうらな海へ
 多くと傳説うかしくとらきだのもしんは死海へ
 せしよりてんのかうあもきらししと居る幸いされを
 せんものしく前よりいつぬらぬ人海へ海山とけ
 てたのこやと原より人孫よりびとあくと幸く後
 しくり卯母えれと種よ入海へ海へいりや何にほて
 あさやうなる伝へいひしとあさやうのうきくゆりたり

三之巻終

けきゆき
 葉のうら
 かのうら
 伝へいひ
 けきゆき

